

皮膚ハ人工蕁麻疹ヲ容易ニ生ス。

以上ニヨリテ本例ハ臨床上著明ノ色素性蕁麻疹ナルモ組織検査ヲ行ヒ得ザリシヲ遺憾トス。

## 土肥鱗狀毛嚢角化症

馬 詰 將

本症ハ明治三十六年土肥、百瀬兩氏ノ初メテ報告サレタルモノニシテ、此所ニ三例ヲ追加報告セントス。

本症ハ毛孔ニ於テ面皰ノ如キ硬キ針頭大ノ黒點ヲ生ジ、之ヲ中心トシテ圓葉恰モ荷葉ノ水面ニ浮ベルガ如キ大豆大ノ鱗屑ヲ作ル新シキモノハ灰白色、舊キモノハ汚穢淡褐色トナル何等ノ自覺症ナシ。腹、腰、臀部ニ始リ漸次上下ニ擴ル、好シデ對側性ニ來ル經過ハ慢性ニシテ數年ニ亘ル。

診斷、黒點ト圓鱗ヲ有シ腰腹ヲ中心トシテ左右對側性ニ來ル自覺症ナク落屑後間ニ白斑ヲ殘ス。

病解ニテハ毛嚢孔ヲ中心トシテ丘狀ニ高マレル角質異常ハ皮脂排泄管中ヨリ初リ毛嚢孔口ニ至リテ甚シク次第ニ周圍ニ移行ス、毛嚢周圍ニ圓形細胞浸潤アリ。

### 症 例

一、淺見某男、二十六歲、塗師、慢性尿道炎、急性濕疹、土肥氏鱗狀毛嚢角化症、十二年六月三日初診。

四年前ヨリ兩腸骨櫛部ニ鱗屑アル發疹アリト見ルニ右側ニ大豆大ヨリ半米粒大ノ褐色圓鱗十四、五個アリ、右側ニ同様ノモノ七、八個アリ、兩膝蓋部ニ明瞭ナラザルモ四、五個アリ。

二、岡山某男、二十五歲、初診十一年二月二日。

診斷、右臀部ニ四、五個アリ。

三、菊地某男、八歲、十年五月六日初診。

診斷、土肥氏鱗狀毛囊角化症。

本症ハ元來何等自覺症ナキモノニシテ患者ハ毫モ苦痛ナク、他ノ疾患ニテ來院セル者ニ偶然發見スルヲ常トス、故ニ當皮膚科教室ノミニテモ今迄ニ上記三例ヲ合セテ十三例アリ、本邦全體ニテハ約六十例ニ及ブ歐米ニテハ未ダ曾テ實驗セザル皮膚疾患ナリ。

食道嚥下運動ノレントゲンの研究

金澤醫科大學第一内科教室(主任山田教授)

中 瀬 眞 亮

嘗テクロネツケル氏ガ嚥下運動ヲレントゲン線徹照上ヨリシテ「口腔内ニ於テ加ハリタル壓力ノタメニ液狀又ハ粥狀食物ガ開放セル食道管腔内ヲ下降シテ胃ニ至ル」ト說ケル如キ簡單ナルモノニアラズシテ複雑ナル機轉ニヨリテ營爲セラル、事ハカンノン・モーゼル・エークマン・シヤ・エル・クラウス氏等ノ研究殊ニレントゲン活動寫眞ノ應用ニヨリテ鮮明セラレシト雖モ本邦ニ於ケル此種ノ研究ハ余ノ寡聞未ダ之ヲ知ラズ、余ハ我が「クリニツク」ヲ訪フ外來患者ノ比較的健康者ヲ選ビテレントゲンのニ食物ノ食道通過時間及ビ二三藥物ノ應用ニ依ル影響ヲ檢セルニヨリ其ノ大體ヲ發表セントス。

食物ノ性狀・溫度・食慾・饑餓感等ノ嚥下運動ニ大ナル影響アル事ハツトニ知ラレシ處ナルガ余ハ複方バリウム「ニ水ヲ加ヘテ液狀、粥狀及ビ固形食ヲ作り之ヲ嚥下セシメ投視上ニ於テ之ガ通過時間ヲ測定セリ、被檢者ニ投視臺上ニ於テ第一斜位ヲトラシメ液狀及ビ粥狀食ニアリテハ三十秒ヲ一時ニ嚥下セシメ固形食ニアリテハ被檢者ヲシテ欲スルマ、ニ咀嚼セシメ欲スル時ニ嚥下セシメタリ、各食物ハ三回ヅ、約一分間ノ間隔ヲ置キテ連續嚥下セシメタリ。